

---

# 城山守拾遺

笹ヶ根伊都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

城山守拾遺

### 【Nコード】

N9966F

### 【作者名】

笹ヶ根伊都

### 【あらすじ】

入学式前日に原因不明の高熱で入院し、一月おくれで高校生活をスタートさせた森田守。彼の通う城山高校の寮生はみな曲者ぞろい。おまけに高校のある城山城址は魑魅魍魎の跋扈する不思議な土地だった。浮生・・・とパラレルになる予定。

## さかいめ

「やあね・・・血なまぐさい」

美しい形の眉が微かにひそめられる。細長のすそを引いて、女が立ち上がると黒い髪がいく筋かの房に分かれてぱつと散った。

「お前」

呼ばれた少女が跪いて頭を垂れた。胸にたらした宝玉が小さく音を立てる。

「境目さかいめを・・・ひいて頂戴」

頷くように今一度頭を垂れたあと、少女は居住まいを正して退出していく。

「わたくしの城山に触れようなんて・・・」  
きれいな白い指がゆっくりと空を滑る。

くすりとひそやかな笑い。

「つかまえた」

## 1・城山遠望

高速道に行くバスから見下ろせば、青田が一面に敷き詰められた平野が見える。その平野を開いて、流れる川筋はきらきらと白銀の光をまとっていて、神々しいままに、海へとつながる湖に流れ込んでいる。『水神』とか『大蛇』とか、そういう単語が頭に浮かぶ。

昨年、できたばかりという高速道路は緑の山に挟まれて少し窮屈そうだが、小さな市に通じる道としてはこれでも十分なのだろう。

特に渋滞もなく木々の隙間からは白い小石を敷き詰めたような建物群が見えはじめる。

何よりも目を引くのはおわんを伏せたような緑の丘とその上にそびえる山城だ。

その名を白壁城。別名を白露城。

『陰気重なり露にこり、白色となるころ、月光を浴びるその姿がもつとも美しい』からというのが通説だそうだ。

朝陽を受けて白く輝く壁に優美な線を描いて連なる黒い屋根。石垣とのコントラストとすらりとした城影は上品で、裾を払って立つ華奢なお姫様のようだ。

その膝元に視線を移すと城山の原生林が薄暗くうつそうと茂っている。桜の季節はとつくに終わってしまったて、その山緑濃く、薄闇を抱えた様は、いかにもおどろおどろしくどこか人外の妖しさを漂わせている。

白露高校一年、森田守は城山市駅に降り立って頭をめぐらし、無意識のうちに白露城を確認した。

駅の南側からはまっすぐの一本道が城山に続いている。

守はスーツケースを曳いてとぼとぼと歩きながら、年寄りが多い街だなと思った。

休日にも関わらず、こうして歩いてみただけで、まだ管理職的においを漂わせた年代から、ママチャリにピンと伸びた背筋が頼もしい相当な高齢者まで次々にすれ違う。

考えごとをしながら歩いてきた足をぴたりと止めた。

五月の陽気はじんわりと、病み上がりの体から力を奪う。

目の前に迫る城を見て、それほどの距離ではないだろうと思ったが、間違いだっただかもしれない。

高層建築物がほぼ皆無の城山市内では、ほぼ全域から城山にそそり立つ白露城を見ることができる。

背中ににじんだ汗。  
曇る眼鏡。

近づかない城。

次の機会はバスで。いや、タクシーでもいいかもしれない。

守はひとつ目の小さな橋を超えたあたりにベンチを見つけて、腰を下ろした。橋の名前は参の堀橋。ここまでお堀があったのか。

「あれがお守りだよ」

無意識の海からばかりと浮上した聴覚が、まだあどけない声に吸い寄せられる。

「へえ」

目の前を、まだ若い保母さんが押す手押し車に乗せられてはしゃぐ保育園児が通っていく。公園かあぜ道に寄った帰りなのかもしれない。

小さな手にタンポポやらもがく昆虫やらを持っている。

その・・・シュウジョウバツタ死に掛けてないか？

目が合うと、会話の二人は天使の微笑みを浮かべてはいば〜いと手をふる。

同じ顔だ。同じ動きだ。同じ声の高さだ。双子だ。

お守って・・・俺？

ぼかんとしている守の前に、銀色の車が一台、ぴたりと止まった。

「森田君！森田守君！」

呼ばれて、とつさに眼鏡をずり上げた。

窓がスルスル開いて顔を出したのは、見覚えのある若い男。ちよっ

と日に焼けているがまだどこか少年くさい顔。

あれは僕の担任だ。

「日下先生！」

「今日来るってきいてはいたけど、出くわしたね。歩き？荷物重たいだろう。乗っていけ」

日下先生はいかにも人のよさそうな顔をほころばせて言った。

「ええつ。いいんですか？」

「城山はまだまだ遠い。歩けないことはないが、なんといつても坂があるからね」

「坂！」

そうだ。忘れていた。学校のある城山は丘陵地帯の一角にある。

学校の正門にいたるには、心臓破りの坂を上らなくてはならない。

まだ病み上がりの体にはこたえる。

やはり、バスに乗らなかつたのは間違いだったな。

心に深く『バス』という言葉を残して、守は立ち上がった。

「入院中はお見舞いにいけなくて悪かったな」

「いやいいです。僕の地元は遠いですから。それより、お見舞いのお手紙ありがとうございます」

「結局どこが悪かったの？」

「・・・それが、原因不明で」

そう・・・あれは、入学式の前日のことだった。

朝、駅まで親に送ってもらおうと、車に乗った途端、突然強いめまいに襲われ病院に直行。

40度を越す高熱に見舞われ入院する羽目に陥った。

その後、悪性腫瘍疑いやら膠原病疑いとかで、いろいろ検査を受けたが、一向に原因がはつきりしない。

あらかた全身調べつくしたころ、俄然体調が回復。気がつけば、四月も終わりだった。

一ヶ月おくれでようやく、学生に復帰したのだ。

荷物を後部座席に積み込んで、助手席のシートベルトを締めながら会話の糸口を探す。

「ここはなんだかお城の街って感じですね」

城はやはり地元の誇りなのかもしれない。

ミラーに映る先生の顔がぱっと明るくなった。

「そうだろう。普通の城下町とはちよつと感じは違うけど。路地をぬけるとすぐに田んぼがあったりなんかする。でもこの城は典型的な平山城。世界遺産の姫路城と同じ。天守の構造はね、東西2本の心柱で支えられた天守台上に5重6階の大天守と3重の小天守2基の連立式入り母屋造りの建物が基部の望楼型なんだ。壁は白漆喰総塗籠で白壁城の由来ともなっている」

先生の口からすらすらと言葉が出てきて思わず感心する。

「なんだか、ガイドさんみたいですね。」

「いや。俺、城オタクだからね。休日ガイドボランティアもしているんだ」

車が城山の坂を上り始めた。両側に並ぶ桜並木が互いに幹を延ばしあい、茂った葉とともに屋根を構成している。ときおりきらきらと陽光が差し込んでくる。

本当に何にもない。

買出しとか、どうすればいいんだろう。

そう思ったとき、何かがふわりと視界をよぎった気がした。影のようで、透明のような風のような何か。

ちっと先生が舌打ち。

「昼間っから・・・物見高いな。お城様のしつけがなってないねえ」

「え？」

思わず聞きとがめて発した問いへの答えは、ミラーごしの一瞥。

「すぐ分かる。君にも城山の血がながれているんだろうから」

独り言に近い言葉になると返答すればいいのか困っていると、車が城へと続くカーブを逸れ、わき道に入った。

さらに登ると開けた場所が見えて、寺院のそれと見まごうような木造の門がどっしりと守りの楯のように建っていた。

これが校門らしい。

どこかで、鶯の声が聞こえて、なんともものどかだ。

門の石垣に腰掛けてアイスクリームを食べている生徒がこちらに視線を向けている。

「おい、日村、長元」

日下先生に呼ばれると、彼らは互いの顔を見合わせて、石垣から下りて近寄ってきた。

「先生。それがお守くん」

「それ、扱いはないだろう。森田、二年の日村と三年の長元だ。長元は生徒会長で、日村は俺が顧問やってる地域文化研究会の部員だ。人懐っこい顔つきの方が日村というらしい。彼はにっこり笑った。ばっちり営業スマイル。」

「部活は、是非『ちい研』に」

アイスの棒を啜えてどこかさばけた感じなのが生徒会長らしい。彼

は腕組みし、品定めをするように守を見下ろしていった。

「『ちい研』向きだな。きつと、あの人もお待ちかねだ」

会話が見えず、きよときよと視線をさまよわせていると、気だるそうに伸ばしてきた手がくしゃりと髪を混ぜた。

ん？なんだこれ。

動けない。

「学び舎の長が許す。君を受け入れよう」

どこか豪胆な仕草で手を引く。その端正な顔にふさわしい笑みが浮かんだ。

「ようこそ。我が城山へ」

舗装された道路の上は五月の陽気のせいで、溶け出しそうなほど暑い。

校長室、職員室を訪問して、今は男4人で坂道を下っている。

「俺は二年の守宮<sup>やまひ</sup>。寮長だ」

ごつい体格のヤモリ先輩は柔道部、柔道着・・・似合いすぎ。

「寮はこの道が二手に分かれた右が男子寮。職員寮に近い方が女子寮。男子寮と女子寮の間は石垣で分けられてる」

「そこ、昔は物見櫓だったんだ」

地域文化研究会の部員だという日村先輩がすかさず解釈を入れる。

「間違っても女子寮にもぐりこもうとか思うな」

「・・・そういう趣味はありません。そんなことで、人生脱落する気はありませんから」

会長の言葉に思わず眉を上げて反論する。

「心配して言ってるんだぜ。教えてやるうか？何年か前に、試験前だからってんで、ノートを借りに行ったやつがひどい目にあった」

「・・・どんな目ですか？」

「ノートを借りたのはいいが、行きはよいよい帰りは怖い。高枝切りバサミを持ったおばあさんが追いかけてきて、首を刳って去って

いた」

「首刈られたのに、なんで高枝切りバサミのおばあさんが追いかけてきたってわかるんっすか？」

「ダイイングメッセージが残されていたんだ。『高枝切りバサミ婆』って」

え・・・つと。ありえねえ。

「こういうのもある」

歌うように日村先輩が言った。

「ノートを借りて戻ろうとしたら、置いてけー。置いてけーと石垣の上から声がした」

「それ、普通に取り戻そうとしたんじゃ・・・」  
後をついだのはヤモリ先輩。

「振り返るとB少年の姿がない・・・夜が明けるとB少年が簀巻きにされてどぶ川に・・・」

「いつから、B少年が混じってたんすか。思いつき見捨てられているし」

「その体は魚に食われた跡があったそうだ」

「ありえん！絶対ありえん！そんなん、新聞沙汰じゃないっすかっ。おもっくそ、出典『置いてけ堀』だし」

「まあ、あれだ」

ゆるく笑いながらヤモリ先輩が、肩をたたいた。  
痛い。なんて馬鹿力だ。この人。

「校則つてんじゃないが、城山には、城山の法がある。いろんなモノと折り合いをつけて生きていくために作られた法だ」

「城山？」

首をひねる守を振り返って、日村先輩がニコリと笑った。

「お守くん、目を閉じてごらんよ」

言われるままに立ち止まってまぶたを下ろす。

「・・・風が吹いてる。・・・葉擦れの音がする。・・・腕に触る風はあつたかい」

会長の声が低いトーンでしみこんでくる。

「でも、それだけか？」

遠くから聞こえる葉擦れの音が前兆のように鼓膜を震わせ、その後に強い風が前髪を煽った。そこらじゅうの木々が、葉がかさかさとして音を立てる。

「・・・それに混じって何か小さな声のようなものが聞こえる。」

キタヨ・・・キタヨ・・・キタヨ。オモリ・・・オモリ・・・キタヨ。

鼓膜が四方から圧される。剥き出しの腕がちりちりする。紫外線・・・だよな？

心の底からじわりと冷たいものが流れ出してくる・・・これは・・・いたたまれなくなつて目を開くと、遠くに三人の後ろ姿。

「うああああつ・・・ちよつと、なんすつか！」

髪を振り乱して追いついた守の顔を一瞥して、会長が日村先輩とヤモリ先輩を振り返った。

「・・・僕の勝ちだ。食券奢れよ」

「ちえ、容赦ないっすね。会長」

「寮まで追いつかないかと思ったのに」

ふつつつと怒りがこみ上げる。

「・・・ちよつと、あんたら！いたいけな下級生をネタに何してんのっ？」

鼻白んだ表情の二人に食つて掛かったとき、会長が歩みを止めた。

見えない何かを計るように視線を上下させる。

「進めねえ」

「どわっ、なんだこれ」

日村先輩もパントマイムのような手つきでぺたぺたと、手を宙に動かしている。

これがうそなら相当な迫真の演技だ。

・・・そう何度もだまされてたまるかっ。

「その手は食いませんからねっ！」  
一歩踏み出したとたん、火花が散った。

あ……れ？

スローモーションのようにゆっくりと体が後ろに投げ出され、尾てい骨に衝撃。

なんだこれ？

「いたたたたっ」

目の前に透明に張り巡らされた壁のような何かが存在している。見た目には分からないが決して超えられない何か。

「だから、言わんこつちやない」

腰をさすって呻く様を、日村先輩が腰に手を当てて笑った。  
悪魔だ。この人。

「境目だ……で、ボス。どうします？」

ヤモリ先輩がペタペタと透明な壁に触れながら尋ねた。

「待つしか手はない」

会長があきらめたようなため息を吐いた。道の傍らには、苔むした地蔵が立っている。結構……いや……かなり不気味だ。

会長は懐から小さなキャンデーを取り出して、当然のようにそれを供える。

目を閉じて、合掌。

「まあ、ここらで一休みしろや」

分けわかんない。

ため息をつきながら、思い思いのところに腰掛ける。

守は傍らのヤモリ先輩を見上げた。

「……あの。俺、理解できないんですけど……何を待ってるんですか？」

「境目が途切れるのを……って説明になってないよな。でも……城山はこんなとこなんだ」

「こつということがよくあるってことですか？」

ヤモリ先輩は首に掛けたタオルで顔をぐりぐりと拭いて、深く息を

吐いた。

「さすがに、それはないね。俺はこんなの初めて。でもここは城山だから」

「僕は二回目です」

日村先輩が人差し指と中指を突き出してちよきちよきと動かす。

「夜行やこうの日に、肝試しをやってたら、こんな風に足止め食らいました」

「夜行!!!」

会長とヤモリ先輩が目をむく。

「肝試しなんかやったんか・・・お前、首刈られて死ぬぞ」

「分かってますって・・・若気の至りですって」

あわてた表情から、なんとなくやばそうな霧陰気が伝わってくる。

「あの・・・夜行って?」

「人外のモノが城山を練り歩く日だ・・・化け物に出くわすと、首を刈られて死ぬらしい。ああ、そうだ。寮則というかおきてとか、それらが渾然一体となったものがあるから、それ一応渡しとく。命にかかわるから、ちゃんと目を通しとけ」

ヤモリ先輩から渡された紙切れに目を通す。

一、 夜行あるときは外出を禁ず

一、 夜分、所定の場所を除いて、刃物の使用を禁ず

一、 夜分、所定の場所を除いて、火の気用いる禁ず

一、 夜分、口笛、鳴り物を禁ず・・・

「って、これなんすか?」

「これは城山で暮らす心得さ。俺たちみたいに小さなころから暮らしている者は、みんなこの城山の法を知ってる。だけど、お前は土地移りしてきた人間だろ?だから、ちゃんと勉強してもらわないと混乱して黙りこくった守の横顔を会長がちらりとみた。」

「他所から来たものにとっちゃあ、城山は不思議なところだ。僕もそうだった」

会長の手がキャンディの包装紙をほぐし、中から白い飴玉を取り出す。

「この人たちは、それぞれに何かしら役割を持っていたり、能力っていうわけじゃないが、視たり、聴いたりすることができる」

「視たり・・・聴いたり・・・？」

なんか話がオカルトめいて来たぞ。というかこの人たちそういう系か？

中学校のときにもいたじゃないか。

『耳鳴りが聞こえると霊が半径1メートル以内に近づいた証拠！』

『見える見える、あんたの後ろに水子の霊がつ・・・！』

みたいな集団。

「信じるか、信じないかは別だがね。たとえば・・・」  
にやりと笑って会長が挑むように言う。

「お前、川に落ちて死に掛けたのに、どうしてだか、気がついたら家の縁側で寝てたなんてこと、小さいときにあつたらう」

ふとヒグラシの声が耳を騁る。ぞわりと腕の毛が逆立った。

「・・・なんで、それを」

答えずに、会長が続ける。

「いとこがいるだろう」

「・・・います」

「その従兄弟・・・橘 静乃だ。うちの生徒だろう？」

「・・・なんで、しってんですか？」

思わずごくりとのどが鳴る。

向けられた強い視線がふと和らいだ。

「かわいいからだ」

はあ???

「今度、紹介してくれ」

「ば、ばかああああっ」

あほらしい。一瞬でも本気にした俺が馬鹿だった。

一気に肩の力が抜けた。

さくり。

背後でアスファルトにきしむ砂の音。

「こんなところで落ち着いちゃって、何の会ですか？」  
振り返る。

のんきな声音の持ち主を見て、どきんと胸がなった。

どこから、どう見ても普通の高校生。

半そでのシャツのボタンをきっちりと上まではめているところをみると、「育ちのよさそうな」とか「几帳面」とか思い浮かぶ。

あどけないとか、そんな感じ・・・けれど、なんだろう。

これは・・・既視感？

これといった記憶が鮮やかに浮かびあがってくるのではなく、どこかつかみどころのないその霧陰気が、もどかしさと特有のうずきを伴って、心象に現れてくるような、そんな感じ。

知っている顔？誰かの血縁？

・・・もつと違う・・・たぶん・・・そう・・・。

何かの結論に到達しかかったところで、肩に衝撃。

「おお！ちようどよかった。篠塚」

大きな掌がデシデシと肩をたたく。

「いたつ。なんすか、さつきからバンバンバン。筋肉馬鹿まる

だしつすよ。ヤモリ先輩！」

「こいつ篠塚っていうんだ。お前と同室だ。こいつ森田だ。仲良くしろよ」

へえと、目を見張つてもものめずらしそうに守の全身をざつと眺めた

篠塚は右手を出した。

「お守りくん。よろしく」

その手を握り返すと、篠塚は森の方を左手で指差した。

「あっちの方、パトカー止まっていたり、制服のおじさんいっぱいいたりするんだけど、君、どうしてだか知らない？」

「ええっ！この辺に警察！」

大げさなりアクションで立ち上がった日村先輩が、びよんびよんと

びながら、森の様子を伺う。

・・・もつとも、無駄な努力みたいだが。

「くそつ、みえねえ」

「無理ですよ。ひむごん先輩。規制線張られてましたから」

篠塚が言ったとき、黙ってやり取りを見ていた会長が立ち上がった。

「帰ろうか」

ひよいつと一歩を踏み出す。ちょうどさつき守が尻餅をついたあたり。

「こつちの規制線は解けたみたいだからさ」

## 2・さかいめ

今、とっても緊張している。

今日が、登校初日だ。授業も、友人作りもなにもかも出遅れている。教室での立場はきつと転校生みたいなものなんだろうな。

「お守くん！こつちこつち」

食堂で朝食を持ったままうろろろしていたら、日村先輩と会長に手招きされた。

椀の淵を味噌汁の液面が何度も乗り越えそうになるのに注意しつつ、そこまで行くと、会長が新聞の文字を指さした。

「見てみな、昨日なんでパトカー来てたか分かったよ」

言いながら日村先輩が守の皿に箸を伸ばす。それをすばやくかわす。「けち。ウインナーおくれよ」

いかにも不当な扱いを受けたといわんばかりに日村先輩は口を尖らせた。

「だめつす」

「じゃあ、会長の卵焼きあげるよ。交換して」

あんたの考え方、間違ってるだろ！

新聞の見出しに思考がとらわれ、言い返すために開きかけた口があんぐり開いた。

字面を辿る。

連続殺人・・・逃亡・・・城山・・・逮捕。

「あそこで誰かに会ったら、もう一人殺したかもしれない・・・つて。あの連続殺人犯が逃げてたんですか？」

「そういえば、一月ほど前に隣県で殺人を犯した犯人が逃亡中だった。生活費欲しさに人に怪我をさせながら逃亡していると報道されていた。」

「逮捕されたのが、城山原生林。昨日、『一休み』しなければ、鉢合わせしてたかもしれない」

「ぎよつとして顔を上げた時、すばやく日村先輩の手が動いた。」

「へい！いつただきっ！」

ウィンナーが満面の微笑みをたたえた日村先輩の口の中に飲み込まれていく。

髪の毛がじょわつつと逆立つ感覚を覚えた。

「うああああつ。何するんですかつ。成長期の少年に必要な蛋白質と脂質の源を！」

「大丈夫。朝、大事なものは糖分だよ」

横の席に陣取ったのは篠塚だ。

「おい！おめえ、ちつとは同室のよしみで味方しろよ！」

「だめだめ。こうして、少年たちは朝の瞬発力と俊敏性を鍛えられていくの。社会性を身につけていくんだよ」

「いらねえよ！そんな社会性と瞬発力！」

守の声をさえぎるように耳をふさぐ。そして一言。

「君、弱肉強食という言葉。知った方がいいよ」  
なんてつれない相棒だ。

寂しくなった皿を抱え込むようにして咀嚼を開始したとき、朝にふさわしいさわやかで単調で、無機質な声が耳に飛び込んできた。

「・・・容疑者は、城山原生林の中で動けなくなっているところを逮捕されました」

誰かが、食堂のテレビのスイッチを入れたらしい。

皆、そのニュースに釘付けとなり、沈黙が朝日がさんさんと降り注ぐ白い食堂の中に落ちる。

窓の外に目をやった会長が独り言のようにつぶやいた。

「ここは、城山だからな」

## おしろさま

特別授業「郷土を紹介してみよう」より

白露中学校 1年3組

橘 静乃

城山を語ろうとするとたくさんの方が思い浮かんでちょっと困ってしまいます。城山には不思議な話、面白い話があつてそれを書いていたら、分厚い本になってしまふかもしれません。

それで、私の大好きなお城の話をしたと思います。

私達城山に住む人々には大切な宝物があります。城山原生林に建っている白露城です。白露のお城には主が住んでいると私たちは信じています。私達はお城の主様のことをお城様と呼びます。

『お城様』

口に出すとちょっとこわいような、でもなんだか心ひかれるような不思議な気持ちがあります。

白露城は城山原生林を含めた小高い丘に建っています。昔の人々はこの山を明山と呼んでいました。明山にはもともと美しい女神様がいて、城山の人々を守っていました。戦国時代にお城が建てられたからは、この丘のことを城山と呼ぶようになり、女神様も里に建てられた神社に移られました。けれど、長いこと続いた戦乱でこのあたりが焼け野原になってしまい、山城が打ち捨てられるようになると、女神様は再び城山に戻ってきました。女神様は焦げた土に種を撒き、雨を降らせ、再び豊かな土地をよみがえらせました。土地が豊かになると人間も戻ってきました。豊かになった城山にはもう一度城が建て直されることになりました。新しくやってきたお殿様はもう一度、女神様を城山から出そうとしましたが、女神様は城山を守る気はありませんでした。お殿様に土地を豊かにし、城山を守

る代わりに、新たに建てる天守閣に女神様の住まいを作るように命令しました。こうして、女神様は白露城の主となったのです。

女神様は災いを追い払い、里をどんどん豊かにしました。城山が豊かな国となったので、歴代のお殿様は女神様を『お城様』として大切に祀るようになりました。

そんなお城ですが、これまでに三度危機を迎えたことがありました。その不思議な話を皆さんに紹介しようと思います。

一度目の危機は明治時代でした。

明治4年の廃藩置県で、白露城も廃城となりました。さらに明治6年の廃城令で一度は杉江市の豪商に競り落とされました。

しかし、何度解体しても、翌日には元に戻ってしまうという事件がおこり、さらには持ち主が原因不明の熱病に苦しめられたり、家の周りに百鬼夜行がでたりという怪異が続いたため、豪商は城の所有者の権利を放棄しました。

その後、しばらく城は放置されましたが、城山市の市民の間に城を保存しようという機運が高まり、日本全国においても城郭保存という考え方がひろまってきて、どうにか天守閣は取り壊されずにすみました。しかし、城の補修費用をまかなうためと、学校用地のために北の丸は解体されました。今、北の丸のあったところに建っているのが、白露高校です。また明治時代の中ごろに、当時駐屯していた軍の失火のために櫓を二つ失いました。

2度目の危機は大正時代でした。このとき、城山には軍が駐屯していました。軍はこの城山を中核となる軍事施設にしようと考え、いくつかの連隊を移転させ、それに伴う大改造を城山に施そうとしていました。

白露城でもたも怪異が起きました。

『城が昼となく夜となく地震のように鳴動し続け、物が飛び、始終獣あるいは妖物のおたけぶ声が聞こえ、生きた心地がしなかった。食料はあらゆるものが腐ってしまった。そんなことが半年も続いた』

公の記録には残っていませんが、私の友達のおじいさんの日記に

はそう記されているそうです。

この出来事が影響したのでしょうか。

白露城は老朽化が進み、改修が望ましいが、そのような莫大な予算は到底捻出不可能とする報告がなされ、計画は撤廃、当時駐屯していた部隊も移っていきました。

三度目の危機は第二次世界大戦でした。

戦争が激しくなるにつれこの城山にも空襲の危機が迫っていました。城山の人間にとってどのようにして城山を守るのが最大の難問でした。当時、日本の城郭は軍の施設として使われることが多く、空襲の標的となる恐れがありました。白露城はその美しい白壁によって空からは格好の標的となったことでしょう。

美しい七夕の日、城山は焼けました。祖母はそのとき小学生だったといいます。恐ろしい爆弾の音は確かにするのにも、まるで見えないうものに守られていたかのようにほとんど城下には着弾しなかったといいます。そのかわり、城下に落ちなかった爆弾をすべて引き受けたように白露城は燃えていました。暗い空を焦がす紅い炎を出して燃え崩れる城を見て、みんな泣いていたといいます。城は翌日になっても黒煙を出して燃え続けていました。

城山をずっと見守り続けてくれた『お城様』が燃えている。

ただもう悲しくて、足が萎え、大人も子供も城山を見上げてその場へへたり込んでいたそうです。

祖母も、生きていく気力がなくなつたようだったといっていました。その夜のことでした。

どこからともなく、大勢の人足が掛け声をかけたり、綱を引いたり、木材を叩く音が聞こえたといいます。

それは夜の城山にこだまし、なんとも不気味で、これは何の怪異だろうと、人々はじつと身を寄せ合い、耳をそばだてて夜を過ごしたそうです。

外に出る勇氣のあるものは、城山の麓にあるイヅナ様（御狐様のよくなもの）を祀る社から城山の天守に向かってたくさんの狐火が連

なっているのを見たか聞いています。

翌日、みな目を疑うような光景を見ました。緑の城山原生林を従え、まるでお姫様のような優雅なたたずまいで、無傷の白壁城が建っていたのです。

濡れた髪のように輝く黒い瓦とくつきりと白粉をひいたような白壁を見て、みんなまた泣いてしまったそうです。

『お城様の眷属である八百の物の怪が、お城様のために一夜城を築いたのだらう』

お年寄り達の間の言い伝えです。

白露城を調査すると建築様式は江戸初期なのに使用されている木材はまだ新しいとか、建ってから一度も大改修をしたという記録がないというのは有名な七不思議のエピソードですが、うそか本当かは分かりません。

城山の人たちはたぶん誰も、それを調べることには興味がないと思います。

城山市内からは何処にいても、白露城が見えます。

家から、学校から、時にはお気に入りのお秘密基地から、私達はたぶんほとんど無意識にお城を探します。

ずっと変わらず、いなくならず私たちを見ていてくれるようで、お城を見上げるとあつたかい気持ちになります。

そういう気持ちを城山の人みんな持つていて、それを共有しているんじゃないかと思うともつたかい気持ちになります。

城山に残る不思議な風習も、不思議な場所やお話も私たちみんなに影響を与えて、そしてそれぞれを見えない何かでつながり合わせてくれるような気がして、私は城山に生まれて、城山に住んでよかったと思います。私は、これからも城山で生きて行きたい。

そんな城山を見てみたいと思いませんか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9966f/>

---

城山守拾遺

2010年10月10日17時53分発行